様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６３８１２１０

研究課題名（和文）図画作品にみる20世紀図画教育変遷の検証

研究課題名（英文）An Examination of Changes in Art Education during the 20th Century Seen in Students' Artwork

研究代表者
蜂谷　昌之（HACHIYA, Masayuki）

広島大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：６０５１０５４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、富山県高岡市の学校に明治期から所蔵される卒業作品を手掛かりに、一地方の学校における図画教育変遷の検証を行ったものである。調査では20世紀における図画教育の展開を整理しながら、図画作品及び関係資料の分析を行った。調査の結果、作品には全国的な教育実践の動向を確認することができたほか、大正期の自由画教育運動を経て、昭和前期には自由画から臨画が再び指導の方法論として浮上した「揺り戻しの時代」と言える実践があったことなど、図画教育の実情を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、明治期から継続的に保管されてきた児童画コレクションの分析を行い、20世紀図画教育変遷の検証を試みたものである。明治期以降に子供が描いた卒業作品という貴重な一次資料を手掛かりに教育実践の観点から捉えた本研究は、教育実践史、地方教育史、あるいは図画作品史の研究として、美術教育史研究における基礎的な研究に位置付けられると思われる。また、作品資料のデジタル化は、貴重な史料を後世に残し、今後の研究における基礎資料としての活用を期待できるものである。

研究成果の概要（英文）：This study examined the changes in the practice of art education at schools located in a region of Japan. It was based on the analysis of students' artwork preserved since the Meiji era at the schools in Takaoka, Toyama. By exploring the development of art education in the 20th century, the study was able to analyze the students' artwork and relevant documents. As a result, this study confirmed that students' art expressions had an influence on and was reflected in the nationwide trend of the teaching practice. Also, one of the essential findings indicated the actual situation in art education, which was that after the free drawing education movement in the Taisho era, copying was reconsidered as a teaching methodology in the Showa era. It seemed the pendulum swung back from free drawing.

研究分野：教科教育学

キーワード：図画教育史　美術教育思想　教育実践史　図画作品

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

創立百十年を超える伝統校として知られる高岡市立博労小学校（以下、博労校と略す）には卒業記念に残された図画、習字、作文が保管されている。百年以上にわたり蓄積された作品は我が国の教育史を映し出す貴重な史料であり、『富山県教育史』などで取り上げられたほか、テレビ番組にもなり全国に紹介された。これまで研究代表者は、臨画教育の隆盛から大正自由教育期にかけての表現や昭和戦時下における表現教育などの調査を行い、児童の表現や教育実践の変容について調査を行ったほか、作品資料のデジタル化を進めてきた。

高岡における実地調査の折、博労校区に隣接する高岡市立平米小学校（以下、平米校と略す）に創校時からの卒業作品が保管されているらしいとの情報が寄せられた。同校は創立百年を迎えた学校であり、博労校と同じく創校以来の卒業作品があると聞き、平米校を訪問、作品を確認した。初期の作品は博労作品と同じ様式で装訂され、図画、綴方、書方成績の保存という共通点も認められた。図画作品には臨画や静物画、写生画などが含まれており、表現内容において、博労作品との類似性を確認することができた。平米作品は一般に知られることなく長く図工室の棚に眠っていたが、創校百周年を機に整理され、日の目を見ることになったという。

博労、平米両校は隣接校であり、互いの作品にみられる表現や関係資料等の調査を行うことにより、一地方の図画教育の歴史的展開を検証することができるのではないかと考え、調査を行うことにした。博労校は 20 世紀初年の明治 34（1901）年に開校し、図画作品は明治 40（1907）年度より所蔵されている。また、平米校は明治 45（1912）年の開校であり、大正 2（1913）年度より図画作品が保管されている。両校の卒業作品は昭和戦時下に欠落があるものの、20 世紀図画教育を俯瞰できるコレクションである。卒業記念として残された作品のみをもって図画教育の全容を語れるものではないが、作品は制作された当時の教育成果を示すものであり、断片的ではあるが時代を追って美術教育の思想や実践を読み解く資料になり得るものと思われる。

２．研究の目的

本研究の目的は、富山県高岡市の学校に保管される卒業記念図画作品を手掛かりに、一地方の学校における図画教育の変遷を検証することである。また、卒業作品のデジタル化及びデータベース化を進めていく。

３．研究の方法

本研究の方法として、博労、平米両校に保管される卒業作品の分析、先行研究及び学校関係資料の調査、卒業生、元教員等関係者への聞き取り調査等を行った。

卒業作品の調査では、資料の整理及び撮影などの進捗に合わせ、平米校の大正期作品の調査、博労、平米両校の昭和前期の作品調査、昭和 20 年代から 30 年代の作品調査、明治期の作品調査、昭和 40 年代から 50 年代の博労作品の調査、という順に進めた。作品調査においては、両校の資料が膨大にあるため、保管状況を確認し、整理を進めた。また、それぞれの時代における図画教育の全国的な動向を踏まえ、博労、平米両校の沿革史や学校日誌、教育関係資料の調査を行い、教育実践の状況を整理した。さらに関係者への聞き取り調査を行い、作品制作時や当時の教育状況について情報を得た。作品調査においては、教育動向や地域的な状況に関する調査、表現の発達に関する調査、題材、技法、性差等表現の分析と変容に関する調査、教科書、教育思想等に関する調査、図画、作文、習字作品の横断的表現分析等を行い、卒業作品と各々の事項との関連を探りながら検証を進めた。

４．研究成果

(1)明治期における図画教育実践

20 世紀初年にあたる明治 34（1901）年に開校した博労校では創校時から図画教育が行われ、明治 37（1904）年頃には図画科の専科指導が始まったようである。図画教員は代用教員として配属され、富山県立工芸学校出身者が授業を行っていた。明治 43（1910）年、高岡市内の尋常小学校五校の図画科を二名の専科代用教員で巡回担当する指導体制が構築された。高岡では銅器や漆器、捺染等の地場産業との関連から、図画科に高い専門性を求める気質があったとされ、こうした地域事情や工芸学校の存在が図画教育の充実を加速させたとみることができる。

明治時代、博労校で使用された図画教科書は、橋本雅邦の『小学毛筆画入門』、国定教科書時代には『毛筆画手本』、『毛筆画帖』、『新定画帖』であった。同校では主として毛筆画による図画教育が行われていたことがわかる。明治期の図画作品には全体として臨画が多く、それに考案画を加えれば、かなりの数を占めている。『博労小学校史』によると、当時の図画の内容として濃淡の明らかな一筆画をよく描いたことや、手本どおりに輪郭を描き彩色したこと、時に子供の顔や花器なども写生したという[①]。明治後期には系統的な図画教育が行われるようになっていたことから、写生画等図画の種類に関しては、さらに詳しく分析する必要がある。

今回、調査対象とした明治時代の図画作品は教科書の図版を模倣した作品が多かった。しかし、同じ図版を描いた作品にも差異がみられ、そこから個性が感じられる。さらに、ただ一つの図版を模写するだけでなく、児童自らアレンジを加えたもの、あるいは複数の図版を組み合わせたものなど、表現に変化が現れていた。また、教科書の学年や種類を超え、異なる手本を組み合わせた事例もあった。明治期の博労校図画教育においては、正確に臨画するだけではない、表現の応用を許容するような実践が行われていたと捉えることができる。

(2)平米校作品にみる大正期図画教育

平米校の学区は高岡御車山祭の「山町」に代表される高岡開町時から商工業の中枢として栄えた地域にあり、同校は高岡の政治、経済、文化を支えてきた町の中心部に開設された学校である。博労作品に着目した大正期図画教育の調査に続き、平米校に所蔵される卒業作品のうち、大正時代に制作されたものを取り上げ、作品や図画教育に関する地域的動向から読み取れる図画教育実践について調査を行った。

これまでの調査では、大正初期から中期の作品には、主として教科書等の臨画や考案画、静物画が残されていたことを確認した。その図画内容に変化をもたらしたのが、画家山本鼎による自由画教育運動である。博労作品には大正 9（1920）年度に表現上の変化があり、風景写生画の流行という自由画運動の影響をみることができた。また、大正 12（1923）年度の作品に初めてクレヨンが使用されたほか、クレヨン画の表現技術に年々上達がみられたことから、博労校では放任ではなく、技術指導が積極的に行われていたことをうかがい知ることができた。

では、平米校ではいかなる実践が行われていたのだろうか。大正中期は自由画運動が全国的に広まった時期であり、高岡においても大正期の図画教育を語る上で自由画教育を抜きにすることはできない。上述の大正 9（1920）年度にみられた表現の変化は、同年に高岡で初めて開催された自由画展である「世界児童自由画展覧会」が一定の影響を与えたものと推測される。また、その翌年には「万国児童自由画展覧会」が、さらに大正 12（1923）年にはクレヨン画の展覧会がいずれも平米校を会場として開かれた。こうした展覧会は当地における自由画の隆盛を印象付ける機会となり、教育実践に自由画が根付いてきたことを示すものである。

平米校所蔵図画作品のうち、大正期の作品にみられる特徴を整理すると、大正時代を通じて教科書に基づいた作品とみられる臨画、考案画、静物画が残されたこと、大正 12（1923）年度作品に自由画教育の影響とみられる風景写生画が出現したこと、大正 14（1925）年度以降の作品にクレヨン画が多く残されたことがわかった。大正期の同校図画教育においては、教科書による実践を基本に自由画やクレヨン画という表現の世界を広げる新しいテーマや描画材が普及し、表現及び指導の内容と方法に変化がもたらされた。大正中期以降の作品には、静物画の背景が鮮やかに塗られ、空間や遠近感が表現されるようになった。さらに後期には、臨画を一つのモチーフとして静物画のごとく描こうとした作品もみられた。自由画や新しい描画材の到来による時代の変化に合わせ、図画教師自身がそれまでの蓄積の上に新たな教育思想や方法を採り入れ、授業実践の場でそれらを具体化させていたのではないかと思われる。

(3)「揺り戻しの時代」：昭和前期の図画教育

大正中期に画家山本鼎の提唱により全国に広がりをみせた自由画教育運動は、高岡においても大きな影響を与えた。しかし、昭和初期には自由画運動の熱気も冷め、様々な立場からの反論があった。また、実践上の問題として、高岡では晴れの日には写生、雨の日には静物画というような偏った実践になり、写生画万能主義として批判が繰り返されていたようである[②]。昭和に入り、富山県では地域的な指導の一環として、粗悪なクレヨンや鉛筆一本しか持たない児童をなくし、学習効果を高めようと画材等の共同購入や共同使用を実施するなど地道な努力もなされたほか、図案教育では既成図案の押し付けではなく、子供が興味を持って構成能力を伸ばせるような指導が行われるようになったという[③]。

次に昭和前期の教科書事情について触れておく。明治時代に作られた国定教科書『新定画帖』は、自由画運動後の昭和 5（1930）年頃には全国で四割ほどしか使用されなかったという[④]。一方で大正末期から昭和初期にかけて民間が発行する参考書（私教科書）が流行し、『小学参考図画』や『新撰小学図画』、『少年少女自習画帖』等が発行され、相当数の学校で使用された。そうした中、教科書改訂を見送っていた文部省は、新たな国定教科書『小学図画』を刊行するに至った[⑤]。

昭和前期に残された卒業作品は、昭和 2（1927）年度から昭和 15（1940）年度までである。作品には風景画、静物画のほか、博労作品には人物画などが含まれていた。期間前半の作品は自由画教育の流れを汲むクレヨン画が多く、表現技術の高さをうかがうことができた。また期間半ばには描画材が水彩絵具に変わり、図画の参考書や教科書が頻繁に用いられ、それらの模写作品が残された。一方、大正期に多くみられた図案は少なくなり、戦時における産業構造の変化の波が教育にも押し寄せていた様子がうかがえた。昭和 10 年代の作品には児童雑誌等も用いられ、それらを手本に時代を反映する作品も残されるようになった。両校では『少年少女自習画帖』が特に多く使用されたようであるが、児童は図版の提供者である板倉賛治や山本鼎、後藤福次郎、南薫造、竹内栖鳳ら画家たちの作品を通して、美意識や表現技法を学んでいたと思われる。この期間の作品には『新定画帖』など明治期の教科書の模写もあり、教師がその内容に価値を見出していたことを示す資料とみることができる。

当時は写生画一辺倒から脱却し、新たな教育理念を模索するなか、私教科書の発行とその模写、さらに児童雑誌にまで手本を求めるという教育が行われた。昭和前期の図画教育の変容としては、自由画の理念を引き継ぎながらも、再び図画教育の中で臨画をさせるという「揺り戻しの時代」であったと捉えることができる。臨画が批判され、自由画という新たな価値を追求し、やがてそれが行き詰まりをみせた図画教育に、自由画時代に失われた臨画が再び図画指導の方法論として浮上した。自由画教育では不可能であった画家たちの多様な表現や図画の基礎

を学ぶ意義を見出し、再確認する姿勢がこの時代の作品に表れていると言えよう。

(4)戦後における図画教育の変遷

昭和 20（1945）年 8 月の終戦により、我が国の教育は全面的に見直され、改革へと動き始めた。昭和 22（1947）年、小中学校に図画工作科が設置されて以降、戦後美術教育は学習指導要領や教科書の改訂、民間の教育運動などの影響を受けながら進展してきた。学習指導要領は社会の要請に応じて改訂を重ね、また検定教科書もその内容を充実させながら美術教育実践への目標や内容を示してきた。学校教育とともに大きな役割を果たした民間美術教育運動もそれぞれの理想を掲げ、美術教育のあるべき姿の探究を続けた。

昭和 20 年代から 50 年代の作品分析から、昭和中期から後期にかけての図画教育実践の状況を把握することができた。小さな配給の画用紙から出発した昭和 20 年代から 30 年代の卒業作品には、主に静物画、風景画、人物画、図案などの考案画が含まれていた。新たな表現として登場したのが学校生活などをテーマとした木版画と、夢物語や空想をテーマとした抽象画であった。この時代の作品には自由に大胆に表現する傾向がみられるようになる。また、生活を捉えるリアルさは、授業風景などの写生に表れている。木版で表現される人物や風景等は細かく彫られており、版画作品の緻密で丁寧な仕事は指導によるところが大きいと思われる。さらに、この間の作品には、戦前及び戦時下に発行された教科書の図版を模写した作品も確認できたが、徐々に臨画作品は減少した。両校の戦後作品をみる限り、図画教科書や雑誌等の臨画を直ちには排除しなかったようである。昭和初期の私教科書まで 20 年以上前の図版が手本になったことや、教科書の学年を問わず参考にしたことは注目に値する。昭和 30 年代前半に臨画がみられなくなったことから、学習指導要領にある教育観や創造主義の思潮が浸透したものと考えられる。数はそれほど多くはないが、戦後しばらくの間、戦前の教科書等を用いた臨画が行われていたことを両校の作品は示すものである。

昭和 40 年代から 50 年代は図画題材の一層の充実が図られた時期であった。この間の卒業作品には一版多色刷りの木版画の流行がみられたほか、カレンダー、未来都市、物語絵、ステンドグラス調の作品など、それまでにはみられなかった図画表現が次々に出現し、図画題材が多様化した実態がみえてきた。卒業作品には、その後定着しなかった一時的な題材もあり、教師が題材や描画材の多様化を試行錯誤しながら推し進めていたものと思われる。表現方法では、昭和 20 年代から 30 年代にはほとんどみられなかった漫画やアニメの影響と思われる表現を確認した。さらに、風景画では構図を大胆に見せる工夫や遠近法を意識した表現がみられ、作品制作にあたって具体的な指導がなされたものと推測できる。また、昭和 56（1981）年の『博労児童作品史』の発行は、過去の作品から表現傾向を学び、卒業制作への意欲付けとする博労校の特殊性を活かした教育実践につながる取り組みであった。卒業記念作品は教員への研修のほか、児童の学習に活用され、教材として重要な役割を果たすことになる。

作品や学校資料の調査から、昭和中期から後期にかけては教育における美術に対する考え方が明確化された時期であったと言えよう。戦後の美術教育思想や政策で強調される創造性や個性を大切にする図画教育が実践されていたことを作品や研究会資料、学習指導案等に確認することができた。昭和中期から後期にかけては、学習指導要領や教科書の発行、民間美術教育運動の隆盛等、美術教育を巡る環境が変化し、新しい考え方を参考に両校の図画教育観が構築された時代であったといえる。次々に開発される新たな図画題材に後押しされながら、創造性や個性の伸長という戦後我が国の美術教育観を代表する考えが形成され、その理念を日々の実践に誠実に結びつけ、定着させようとした姿勢が両校の卒業作品に表れているようであった。

(5)作品のデジタル化

調査の進捗に合わせ、図画作品のデジタル化を行った。博労校所蔵作品では昭和中期から後期にかけての作品、平米校所蔵作品では大正期から昭和中期の作品についてデジタル化を進めた。また、両校の作品は年度別に保管されているが、尋常科作品のなかに高等科作品が含まれる等の混乱がみられたため、資料整理を行いながら、一部の年代の作品を再度撮影するなど、作品資料の整理及びデジタル化を慎重に進めている。

(6)今後の展望

博労、平米両校に保管される卒業記念図画作品を手掛かりに図画教育実践の検証を行ってきたが、今後の課題として、画題の正確な把握とともに、当時の教科書及び指導書の分析を行い、改めて作品と照らし合わせてみる必要があると考えている。また、地域的動向を探るため、県教育雑誌や研究紀要等の調査を進めるとともに、当時の教員や卒業生から聞き取りを行い、図画教育実践の実像を明らかにしていきたい。

＜引用文献＞

①博労小学校史編さん委員会編（1971）、『博労小学校史』、高岡市立博労小学校、p.223
②同上、p.226
③富山県教育史編さん委員会編（1972）、『富山県教育史下巻』、富山県教育委員会、p.1035
④金子一夫（2003）、『美術科教育の方法論と歴史』〔新訂増補〕、中央公論美術出版、p.187
⑤山形寛（1967）、『日本美術教育史』、黎明書房、pp.490-491

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計７件）

①蜂谷昌之、昭和 40 年代から 50 年代の図画教育に関する研究－博労小学校所蔵資料及び図画作品の分析を中心に－、美術教育学研究（大学美術教育学会誌）、査読有、51 号、2019、pp.273-280

②松岡敬興、蜂谷昌之、道徳的視点からみた大正期児童作品に関する研究－博労小学校所蔵作文及び習字作品に着目して－、山口大学教育学部研究論叢、査読無、68 巻、2019、pp.47-53

③蜂谷昌之、明治期における図画教育に関する研究－博労小学校所蔵資料及び図画作品の分析から－、美術教育学研究（大学美術教育学会誌）、査読有、50 号、2018、pp.297-304
DOI:10.19008/uaesj.50.297

④蜂谷昌之、新聞報道にみる大正期自由画展覧会－北陸地方における世界児童自由画展覧会を中心に－、美術教育学（美術科教育学会誌）、査読有、39 号、2018、pp.249-261

⑤蜂谷昌之、戦後の図画教育変遷に関する研究－昭和 20～30 年代の図画作品に注目して－、美術教育学研究（大学美術教育学会誌）、査読有、49 号、2017、pp.289-296
DOI:10.19008/uaesj.49.289

⑥蜂谷昌之、昭和前期における図画教育の変容－高岡の二つの小学校所蔵作品を手掛かりとして－、美術教育学研究（大学美術教育学会誌）、査読有、48 号、2016、pp.321-328
DOI:10.19008/uaesj.48.321

⑦蜂谷昌之、平米小学校所蔵作品にみる大正期図画教育の変遷－自由画教育の地域的動向に着目して－、美術教育学研究（大学美術教育学会誌）、査読有、47 号、2015、pp.255-262

〔学会発表〕（計３件）

①Masayuki Hachiya、Making Connections through Students’ Artwork: Focusing on a Case from a Japanese School、The 6th Roundtable Meeting of the Asia-Pacific Network for Holistic Education: International Conference、2018

②Masayuki Hachiya、A Study on Changes in Students’ Artwork in the 20th Century: Focusing on Grade 6 Pictorial Works Preserved at an Elementary School、The 35th World Congress of the International Society for Education through Art、2017

③蜂谷昌之、新聞報道にみる大正期自由画展覧会－北陸地区における世界児童自由画展を中心に－、第 39 回美術科教育学会静岡大会、2017

〔その他〕

①Masayuki Hachiya、Making Connections through Students’ Artwork: Focusing on a Case from a Japanese School、Proceedings, The 6th Roundtable Meeting of the Asia-Pacific Network for Holistic Education、2018、pp.41-47

②富山県高岡市立博労小学校ばくろう思い出館（卒業作品展示室）における展示作品の監修及びポスターによる研究成果の紹介

③同館における作品データベース整備への協力

④博労小学校児童に対する卒業作品の解説

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：松岡　敬興

ローマ字氏名：(MATSUOKA, Yoshiki)

所属研究機関名：山口大学

部局名：教育学部

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：10510539

(2)研究協力者

研究協力者氏名：小沢　昭巳

ローマ字氏名：(OZAWA, Akimi)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。